

愛された記憶

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年6月25日

連載の最後に、虐待を受けて育った私の友人のことを伝えたい。4歳で交通事故に遭い、弟は脳に損傷を負い、母を失った。数年後に父は再婚、小学校3年の時から、義母による暴力が始まった。殴る蹴るは日常、階段から突き落とされ、引きずり回された髪の毛は束になって抜け、熱いやかんをつかまされ火傷をした。夜、寝ていると鬼のような顔で、頭を踏みつけられた。義母だからではなく、その人の生い立ちにも問題があった。

玄関から入ることは許されず、鍵の開いている窓や裏口を必死に探した。「お前には汚い血が流れている」と言われ続けた。でも父や弟の前では一切暴力はふるわず、“かわいそうな弟”は本気でかわいがった。父は仕事人間で忙しく、彼女もまた父には話さなかった。

会社の寮に入り初めて救われた。しかし彼女を癒し、立ち直りを助けたはずの夫とは彼の心変わりで最近離婚した。息子と二人の生活になった。今、人知れず頭を柱にがんがんぶつけ続け、発作的に髪を根元からばっさり切り、できれば死にたいと願い、でも子どものために必死に思いとどまる日々である。

虐待は連鎖すると言われる。こんな環境で、わが子への虐待を繰り返しても不思議はない。でも連鎖しなかった。彼女には、自分では気づかない“愛された記憶”があった。祖母の遺品を整理していて、母のアルバムを見つけた。幼い彼女の写真とやさしい書き込み。「大丈夫。私は人を愛することができる。短い間だったけれど、こんなに愛されたのだから」と。

つらいけれど実の親から虐待を受ける子どもたちもいる。私たちにできるのは、社会全体で“愛された記憶”を持てる場所を作ることだ。